

巻頭言

ムダの先に広がる世界

辻 信一（『ナマケモノ教授のムダのてつがく』（さくら舎）著者）

社会はムダを嫌っている。敵視さえしている。そこに生きるぼくたちも、なぜかムダを恐れ、そこから逃れようとしている。ふと「ムダ」の身になって考えると、ずいぶん生きづらい世の中になっているにちがいない。そして、ムダにとって生きづらい世界とは、果たしてぼくたちにとって生きやすい世界なのか、とぼくは考えずにいられない。

ますます多くの人々を悩ませているムダをめぐる問いも深刻さを増している。「今やっていることはムダなのではないか」から「生きていてもムダなのではないか」、さらには、「自分は何の役にも立たないムダな存在なのではないか」まで……。どうやら、せせせとムダを省くことに忙しかった自分自身が、今や、ムダな存在として社会から見捨てられようとしているらしいのだ。

そもそも、ムダとはなんだろう？ もともと自然界にはムダはない。それは人間が世界に持ち込んだレッテルだ。自分たちにとって役に立つものを役に立たないものから、必要なものを不必要なものから区別してきた人間は、やがて、この能力こそが世界に君臨する者の証であるという不遜な考えに至った。以来、合理主義、功利主義、実利主義、経済性、生産性、効率性などを信奉する近代的な世界観を身につけた人間は、いつの間にか世界を役に立つもので覆いつくすことをさえ夢見るようになった。

要・不要の区別ができて、ムダをさっさと切り捨てる能力をもつ人ほどすぐれてお

り、教育とはその能力を身につけるためにある、という思い込みが人々の心のうちに棲みついてしまっている。でも、考えてみなければいけない。ムダなモノやコトが一掃された世界の景色とは、しかし、一体どのようなものだろうか、と。いや、モノやコトだけではすまない。あなた自身も不要とされた途端に省かれる。そうならないためには、自分が役に立つ存在であることを証明し続けるための、終わりなき競争にいそむしかない。

コロナ禍が始まり、「不要不急を避ける」というスローガンが社会に広まって間もないころ、今は亡き音楽家、坂本龍一の「“無駄”を愛でよ」という記事がぼくの心をとらえた。グローバル化した経済社会の負の側面が顕在化したコロナ禍の今こそ、社会を変革する絶好の機会だと彼は言った。そして、効率とは違う原理、つまり、ケアやゆとり、遊びやアートといった“ムダ”が溢れている社会を目指すことを訴えた。

もう一度、心を鎮めて周囲を見回してみよう。そして、自分にとって本当に大切な物事は何かとしてみる。そこには「役立つ」という社会的な規定に当てはまらないものがいっぱい佇んでいるはずだ。

「ムダのてつがく」とは、目先の利害に一見合致するものだけをよしとする功利主義的な態度が、切り捨ててきてしまった大切なつながりを再発見しようという試みだ。役に立つか立たないかという価値判断の向こう側にある、豊かな時間を取り戻そうではないか。